

「恋とりっぴい」

@山形おきたまパワースポット王国

プロジェクト事業

～良縁を神の使い「うさぎ」が結ぶ旅～

■ペルソナ案

【名前】置田 麻子（おきた まこ）

【年齢】30歳（独身）うさぎ年

【家族構成】父と母、兄

【居住地】仙台市太白区長町（仙台市の副都心の住宅地）

【居住形態】1DKのマンションに一人暮らし

【職業】・OL

- ・仙台駅西口から徒歩7分の出版社で編集を担当（契約社員）
- ・将来はライターとして独立を考えている

【通勤手段】地下鉄（長町南ー仙台）約10分

【年収】380万円

【趣味】旅行、書道、読書、レトロな小物収集

【学歴】東京私立大卒

【思考や性格】

- ・自分で興味のあることの情報積極的に集める。
- ・時間とお金については、自己采配する確率が高く、「じりつ（自立と自律）」している。
- ・大学からの東京暮らしで、情報に関する感度が高く、価値観がある程度確立されている。
- ・様々なことに興味・関心があり、自ら積極的に行動を起こす。
- ・美容、食生活、運動に興味がありヘルシー志向。



- 少し高価でも価値があるものは買う。
- 近況の報告は SNS を使って発信するより、直接会って友人たちと話したい。
- 自分の能力を高めるのが好きで、新しいことにも積極的に挑戦する。

【平日の過ごし方】

- 基本、仕事が終わったらすぐ帰宅する。
- 週 1、2 回は、仙台タウン情報誌「S-style」等を参考にし、気になったお店に友人と行く。

【休日の過ごし方】

- 1人で自宅で過ごすことが多い。
- 友人と2人で、食事やショッピング、カフェでおしゃべりを楽しむ。

【ファッション】

- 「UNITED ARROWS」、無印良品、時々ユニクロなども利用する。
- 最近スマホアプリ「SHOP LIST」を利用

【好きな雑誌、TV 番組】生活情報雑誌「S-Style」ファッション雑誌 IN RED

【最近の仕事・プライベートの様子】

- 仕事が忙しく、プライベートを楽しむ時間がないが、忙しい中でも関心のあることには時間をつくって楽しんでいる。
- 仕事で疲れているから人と話して癒されたい。
- 恋人は募集中だが、出来たら良いなあ程度で、積極的に動いているわけではない。
- いろんな人と交流しネットワークを広げることを重視しているため、食費などの交際費が高くなってしまふ。
- 貯金しなくてはと思いつつも、趣味や交際費にあててしまふ。



【旅行についての傾向】

- 最近の仕事が忙しく、友人とも予定が合わず、なかなか旅行に行くことが出来ていない。
- 行きたいところがあれば、先の予定を立てて時間を作って行く。
- 基本、友人と2人で行くことが多い。
- パワースポットめぐり、リフレッシュを旅行に期待している。
- 旅行先の情報は旅行雑誌やSNSで集め、常に新しい情報にアンテナを張り巡らしている。
- プランは宿、予算を決めたら後は現地で情報収集しながら旅行することが多い。
- 散策しながら街並みを見たり、現地の人と会話しているとその土地独特の文化や歴史に触れることが出来て楽しい気分になる。
- 旅行には美味しい食事とリフレッシュできる温泉が必須。

【過去背景】

実は、現在の自分は元気ががんばっている自分を演じている部分も。
学生時代いじめにあった辛い過去がある。
現在、明朗活発なのはその裏返しの部分もある。
詳細は、ストーリーの背景参照

■ 「経験ストーリー」案

悪縁を絶ち良縁を神の使者「うさぎ」が結ぶ旅 ～ココロとカラダのデトックス～

●置田麻子（ペルソナ）の背景

淡いピンク色の封筒がポストに入っていた。「恋とりっぴ」へようこそ！と書かれている。いつもなら、ゴミ箱直行のダイレクトメールだが「置田麻子様」と丁寧な手書き文字が気になり、麻子は思わず封を開けてしまう。「悪縁を絶ち切り良縁を結ぶ旅」・・・

どうやら旅行会社の宣伝物らしい。麻子はこの手の広告が嫌だ。しかも、行先は秘密のミステリーツアー。「だまされないわよ！どうせ、新手の詐欺商法よ！」と、ゴミ箱に投げ込んでしまった。その音でびっくりしたのか、ゲージの中で「ユイちゃん」が飛び跳ねた。

「ユイ」とは、麻子がペットとして飼っているウサギ。一緒に暮らして3年はたつだろうか。麻子は、とって「ユイ」をかわいがっている。

置田麻子30歳（独身）。仙台駅西口から徒歩7分の出版社で編集を担当（契約社員）。将来は雑誌やフリーペーパーを発行する編集者として独立を考えている。夢に向かって元気で活発のがんばり屋さん。彼氏とも3年交際が続いており、充実した生活を過ごしていた。仕事のにも、斬新なセンスを評価され、来年には契約社員から正社員に抜擢されるという話もあがっていた。

しかし、それは表の姿。麻子には辛い過去があった。学生時代の彼女はひどいイジメを受け、いつもひとりぼっち。友達と交わることができない子だった。唯一の友達は、母が12歳の誕生日にプレゼントしてくれた「ウサギ」。中学、高校と辛い時はいつも「ユイ子」と名付けたウサギに励まされ、辛さを乗り越えてきたのだ。

ところが、麻子が高校受験の時「ユイ子」は死んでしまう。原因は、麻子の父親。麻子が修学旅行の留守中、麻子がウサギばかりかまって人間と関わらなくなってしまうのを心配して、わざと父がウサギに餌をやらなかったのだよ！と兄から聞いたのだった。

麻子は父親を恨み、家を出る決心した。優しい母親に止められたが、「お父さん許さない！」と、その後一度も実家に帰っていない。麻子の異常ながんばりぶりもこの裏返しなのだろう。

そんなある日、麻子の提案した特集記事企画が雑誌のトップ10ページに採用される候補になった。契約社員としては初の大抜擢である。同じ部署の正社員の先輩が、最後のツメを手伝ってくれた。深夜までかかったのだが、「がんばりなさいよ！」と祝杯を上げてくれ、その先輩

が翌日、編集局へ一緒に原稿を持ち込み、プレゼンしてくれることになった。

しかし、プレゼンターは麻子ではなく、先輩の名前が記入されていた。そう、先輩が手柄を横取りしたのであった。麻子はなにもかも嫌になった。うまくいっていたはずの彼氏ともギクシャクし、別の女性と付き合い始めてしまう。肝心の特集記事は大ヒット。過去最高の販売部数を記録。先輩は「サポートありがとうね」と涼し気な顔。麻子はなにもかも嫌になり、暴飲暴食に走る。身も心もボロボロになった。

「もうこんな会社で働けない。契約社員だから差別されるのはおかしい！」麻子は、久しぶりに夜空を見上げ月を眺めた。幼いころ、母親がおんぶしてくれたときと同じ月がそこに輝いていた。お月さんの中でウサギが餅つきをしているのを信じていた麻子。母親と十五夜の時一緒に歌を歌いながら食べた「おもち」。今でも麻子の好物は「お餅」だ。

「ユイ子」はお月さんに帰ったのよ・・・誕生日プレゼントにくれたうさぎの「ユイ子」のことが思い出された。

「お母さん・・・」麻子の頬が月の光で濡れていた・・・

「ユイ子」のことが忘れられず、今飼っているウサギの「ユイ」と過ごす時間とこの時間が唯一の癒しの時間。「ユイ」との出会いは取材先にいった小学校。ちょうど、赤ちゃんウサギが生まれたところで「白くておもちのようなうさぎ」があまりにも昔飼っていた「ユイ子」にそっくりだったので、大切にしますからとお願いしていただいていたのだ。

「ただいま～」

ユイが飛び跳ねて麻子を出迎える。あまりにも跳ね方がひどくゴミ箱が倒れていた。ゴミ箱の中身もあふれ、「ユイ」が紙を行儀わるくかじり、紙屑が散乱していた。すると・・・

～良縁を神の使い「うさぎ」が結ぶ旅～

というフレーズが目飛び込んできた。「うさぎ駅長 もっちい」まさに「ユイ」とうり二つの白ウサギの写真が目飛び込んできた。

毎月購読している「ウサギと暮らす」(マガジンランド社)の企画だから安心かな。主催旅行会社が「たびむすび」という名前にもひかれた。

「よし! どうせ、今の私はどん底なんだ。このツアーに申し込んでみよう!

★起：絶望★～悪縁を断ち切り切る～山寺参拝～

●ストーリー

数日後、再び、淡いピンクの封筒が来た。相変わらず宛名は手書き。メールで配信すればよいのに、なんてアナログな会社なのだろう。でも麻子は好意的に受け取った。集合場所の「赤湯駅」見て驚いた。麻子の故郷は、山形県だからだ。麻子はなつかしさと戸惑いを覚えた。麻子の出身地は、山形県中央部の村山地方。今回の「恋とりっぴ」の集合場所である「赤湯」は置賜地方という山形県南部。山形県は良く人の横顔に例えられるがちょうど「えくぼ」あたりが集合場所だ。キャンセルしようと思ったが、「悪縁を断ち切り、良縁を神の使いウサギが結ぶ旅」という言葉が引っかかった。

日程表には、今回の「旅のしおり」が同封されていた。ご丁寧にも集合場所に来るまで、各自で「縁切り」をして来てくださいという「指令」も記入されている。

「縁結びの神社」はあれど「縁切り神社」があるのをご存知ですか？一つの恋が終わり、次へ進むためには大切なこと。過去をリセットしましょう！縁切りは「恋愛」だけではありません。同姓どうしの人間関係や病気など、良くないものを断ち切ることも含みます。ここ「山形おきたま」は運が良くなる「パワースポット王国」。まずは、悪縁を切ってからいらっしゃることをお勧めいたします。例えば、首都圏から山形新幹線「つばさ」は福島で、「やまびこ」を切り離します。（切り離されるのではありません）これも1つの儀式です。「悪縁を切り離し、希望の翼へ」。さらに、悪縁切りで知られる「立石寺（山寺）」で根本中堂に安置された薬師如来に悪縁を絶ち切ってもらうのはいかがでしょうか？

●置田麻子（ペルソナ）の想定される心の動き・感想

- ①絶望状態だが、手紙を受け取るたびに神に導かれるそんな不思議な気持ちが出て、少しワクワクして来た
- ②快気祝いに「包丁を買った」人のエピソードを知っているから断ち切るに悪いイメージはない。
- ③全世代には不向きなテーマだと思うが、20代後半～30代後半は「断ち切る」というこの話は理解できる。
- ④一人旅ではなく、知らない人も参加するかも？人見知りの自分でも大丈夫だろうか？

●ストーリーの意図・ポイント

- ①「悪縁を断ち切り、良縁を神の使いウサギが結ぶ旅」はペルソナと合致している。
- ②「悪縁を断ち切る」自体は、ネガティブな印象を受ける言葉だが、「悪縁を断ち切り、良縁を結ぶ」というのが今回のストーリーの根幹部分。「暗」があるから「光」が輝いて見えるのと同じく、「悪縁」と「良縁」という柱は大切。キャッチーである。

★承：望郷★～フラワー長井線プチ食堂車～水のまち長井～

●ストーリー

ログハウス駅舎がかわいいフラワー長井線「赤湯駅」に集合。無事に山寺の「縁切り」を終えた置田麻子は赤湯駅に到着した。自分が生まれた故郷も同じ山形県。赤湯駅のある置賜地方の存在は知っていたがほとんど知識がない。ただ、季節感、風土、空気感や匂いなどが妙に懐かしく、センチメンタルな気分になる。6月下旬の今日は、山形名物さくらんぼの木に赤い実がたわわにぶらさがっていた。「そういえば、ご近所におすそわけもらったな」と母親を思い浮かべた。

赤湯駅からは、麻子を含め10名の女性が参加すること。ほぼ、彼女と同年の独身女性。ほとんど2名～3名のグループ参加。麻子と福島から来た女性が1人参加だった。みんな活発そうで、麻子は気おくれしそうになった。落ち込んでいても仕方がない。ここは無理して明るくふるまうことにした。

「置田麻子です」。「おきたま」子と呼んでください！少しすべったけど、そのおかげで参加者の気持ちが和いだようではあった。麻子であった。「ミステリーツアーなので行先はわかりませんよ。でも、それが今回のツアーの面白いところです。恋の行方もだれもわかりませんからね（笑）」と、大変ユニークな添乗員さんの案内で、フラワー長井線というローカル線のホームへ誘導された。そこには、たった1両の列車がポツンと停まっている。「かわいい～！」と参加者全員の声。車体には「うさぎ駅長」のキャラクターがラッピングされている。中に入るとさらにびっくり、普通の4人がけボックス席に小さなテーブルがあしらわれ、ピンクの風呂敷で包まれた2段重ねのオリジナル駅弁とワイングラスが置かれていた。

「プチレストラン列車によろこそ！」地元出身のソムリエ＆料理長のイケメン？佐藤さんが手作り料理とワインでおもてなしをしてくれた。麻子も白ワインと赤ワインを1杯ずつ飲み、他の参加者と楽しいひと時を過ごした。昔の「駅弁売り」の格好した農家のおじさんが途中で乗り込んできて、事前野菜や平飼いのたまごを売りに来た。今回の駅弁の食材もこのおじさんが育てたとのこと。ダイエットはカロリーを減らしたりご飯たべないで我慢する辛いものではダメなんじゃよ。体の毒素を出すために食べることも必要だべさ。と山形弁ではなしをしてくれた

「おじさん！それってデトックスのこと！」と参加者。「なんだべ、そげな食べ物しらんわい！」と農家のおっちゃん。

お酒もはいて車内は大いに盛り上がり、ココロも綺麗になるような「デトックス縁結びパワーランチ」は大好評だった。

昼食の後、長井駅で「プチ食堂車」を降りる。最上川発祥の地とも呼ばれ「山の港」といわれている水の町長井を散策。江戸時代舟運で栄えたレトロな街はいたるところに水路をみることができる。吉永小百合もロケに来たという豪商「やませ蔵」や「丸大扇屋で記念撮影。スイーツとお茶でほっこりも。その後、鈴木酒造店にて震災で故郷と生活を失った酒蔵が長井で奇跡的に復興した酒蔵見学。鈴木大介さんの復興物語に共感と感動を覚えた。麻子には故郷も両親も健在している。どん底の自分はまだ気持ちの整理はできないが、大介さんの話に熱いものを感じた。

●置田麻子（ペルソナ）の想定される心の動き・感想

①列車に乗りながらガイドがいて、お弁当を食べた経験は初めてなので、一気に旅行に来た感じがした。ガイドの人もおもしろかったフラワー長井線プチ食堂車。車掌さんとかおもしろかった。見ていて楽しい。その地域にどういう人が住んでいるのかがわかると、ただ行くツアーじゃなくてそこに愛着が生まれて、また会いに来たいと思う。

②かわいい列車が好き。1両を貸し切って最初から最後までゆったり乗って、説明を聞きながらご飯を食べるのは普段はできない経験。その中に地元の人もいて、電車の中でも地元の話が聞けたり、白鳥も見れた。電車の始発から終点までの中にいろいろなことが織り交ざっていて良かった。

③長井線。電車が古くてぼろぼろでぎしぎしの電車だけど、昭和感があって楽しかった。

昭和の時代に馴染みがないので憧れがある。「半兵衛」とか昭和のレトロな居酒屋みたいな空間が私たちの世代は大好き。知らない時代だからこそ、そこに自分たちがいて、「長井線で撮った写真って、昭和っぽいよね」みたいな感じがいい。逆におしゃれ。

④私は古い建物が好きなので、古いお屋敷みたいなのところに行けたのは良かった。（丸大扇屋）

⑤扇屋のいろいろの火もよかった。水が地域の特徴で、家の中まで水の音が聞こえてきた。寒いけどいろいろの火を見て落ち着いた。

⑥一番印象に残ったのは鈴木酒造さんでした。震災の復興の中で、私も被災地である宮城県に住んでいるけれど何もできなかった思いがあって、仕事に対する姿勢など悩むことがあって、鈴木さんの一生懸命働いている姿と、お水や米をいちから探してという話を聞いて、職業は違うけれど、仕事に対する姿勢を感じて、すごく印象に残った。話が聞けたことが良かった。

お酒もおいしかった。

⑦鈴木酒造さんのストーリーが心にジンときた。浪江で頑張っていて被災したけれど、縁があってこの地域でやっているという話は良かった。魂をゆさぶられた。

●ストーリーの意図・ポイント

①モニターツアー時に「方言ガイド」や「駅弁」「プチ食堂車」を盛り込むか実は一番迷ったところ。しかし、30 前後女性の生の声、女性誌、女子向けの旅行雑誌を研究した結果、普段体験できない「非日常感」の演出は好感触と判断。結果、とても評判がよかった。

②カラダのデトックスはすぐには効果には現れない。しかし、そのヒントを「自然野菜をふんだんに盛り込んだ駅弁」で感じとって頂くことをねらった。まさにその駅弁の食材を生産している農家のおやじさんにも乗車頂き、語って頂いた。

③「カラダのデトックス」は1日で伝えきれるものではない。そのきっかけをつたえることができればと思う。生産者とのココロのふれ愛は感じとっていただけたと思う。

④前回のインタビューでは、長井市の観光資源の魅力がなかなか伝わらず、当時のインタビューでは最低評価であった。

⑤しかも、今回のモニターツアーは「冬」の催行。そこを逆手にとり、歴史的にも文化財的にも価値のある丸大扇屋の商家の囲炉裏に、火をおこし、コーヒーとスイーツを楽しんで頂いた。これが、以外にも「本物感」「非日常」という切り口が受けた。

⑥この鈴木酒造店こそが「ココロのデトックス」を感じさせるスポットであろう。

★転：希望★～うさぎ商店街～熊野大社良縁をむすぶ～赤湯温泉瀧波旅館

再び、フラワー長井線に乗り、宮内駅に到着。ここでは全国でも珍しいかわいいウサギ駅長＝「もっちゃん」がお出迎えしてくれた。駅にはかわいいグッズも売っている。ウサギは、縁結びの神様のお使いとして神話に登場する。そして、なんと熊野大社の神主がうさぎ商店街を案内してくれた。これはサプライズ。参道に続く「うさぎ商店街」にはピンクののぼり旗がたちならび、「招きミニうさぎ」「縁むすびスイーツ」「縁結びのピンクカレー」などこれまたかわいいグッズにお財布がゆるみそう。うさぎ商店街の店主のおもてなしやお茶の振る舞いもあった。茶柱がたったのでなにか良い出会いがある予感も？楽しい時間はあっという間。いつのまにか薄暗くなってきた。今宵は満月。縁結びの神の使い「うさぎ」と共に月の光にみちびかれ、東北のお伊勢さん熊野大社へ。本殿裏に、うさぎが三羽隠し彫りされています。うさぎを三羽見つけた人が、恋や願い事が成就したこと、「願いが叶う」「しあわせになれる」と言い伝えられている。熊野大社の神様は、縁結びの神様。月に一度「月むすび」という神事が行われる。満月の夜、月の光と三羽のうさぎが幸せへと導く縁結び祈願祭。なんだかとてもロマンチック。ここが「恋とりっぴい」一番のクライマックス。麻子は、三羽のウサギを探せなかったのだけど、「願い文」を書けば縁結びの神様に「三羽のウサギ」が願いを届けてくれるとか？月結び終了後は、旅館のおもてなし。赤湯温泉いきかえりの宿滝波（上杉藩の庄屋を移築復元した民芸の宿。夕食は地元産の有機食材をつかった米沢豚や野菜をご堪能。大石をくりぬいた露天風呂など4種類のお風呂で寛ぐことができる。厚さ2センチもある米沢豚のしゃぶしゃぶ美味美肌温泉でココロもカラダも美しく・・・

●置田麻子（ペルソナ）の想定される心の動き・感想

- ①お店の名前もおもしろかった。お肉屋なのに「はなや」だったり、団子屋なのに「クリーニング屋」だったり……。小さい診療所の名前が「ミス医院」という名前だった（笑）。
- ②良縁をいただける熊野大社。うさぎにまつわるというのが、女性が行っても楽しめそうというキャッチな印象がある。
- ③雰囲気と「いきかえりの宿」というのが良かった。癒されようと思って行ったので、餅つきが大好きな私も大満足。

●ストーリーの意図・ポイント

今回の旅のクライマックス。「転」の演出が一番のポイント。「月むすび」「いきかえりの宿」というキーワードがわかりやすく資源の魅力も強く、モニターツアー時も高評価を得た。

★結：羨望★～朝採りさくらんぼ狩り～戦国武将のまち米沢～

昨日とは何か変化した気分。パワーがみなぎっている。実は朝飯前の一仕事というかお楽しみを、昨晚旅館の若旦那に内緒で耳打ちされていたのだった。麻子はもちろんツアー参加者限定で。実は、早朝からサクランボ狩りにいくというもの。朝の採れたてさくらんぼは、昼間とは比べ物にならないほど糖度が高くおいしいとのこと。山形県人である麻子さえしらぬ事実だった。まあ、イケメンの若旦那が案内してくれるから全員参加した理由かもしれぬが（笑）。

さくらんぼ狩りの後は、旅館の主、みずからがつく、餅つき朝食。なんと食べ放題！いつもはグリーンスムージで済ます麻子。お餅は縁起を担ぐハレの食という主のすすめで、ついついたくさん食べてしまう。特に、うこぎとずんだが美味しく地産地消で自然食。ますますパワーチャージアップ。

朝食後はゆっくりの10時出発。旅館にはイギリス製のビッグベン（レトロタクシー）がお出迎え。白い手袋の運転手が黒光りしたドアを引き、麻子たちをエスコート。温泉街には4軒のワイナリーがあり「ワインセラーもあつたら、好きな買ってける？冷やしてやったら」と運転手。車はイギリス製だが、山形弁まるだしなところが返って微笑ましい。「この車は、イサベラ・レトロンというのですよ」と教えてくれた。かつて英国の女流旅行家イザベラバードがこの地を訪れた時、その実り豊かな大地と人情の温かさから“東洋のアルカディア（理想郷）”と誉め挙げた土地。「そのイサベラバードが見た景色やもっと良い景色みせてやったら」と運転手。景色も楽しみですが、でもなにかが今日から変わった自分も楽しみ。少しだけ自分が優しくなれた気がするからと麻子。※冬季＝さくらんぼ狩りの代わりに飯豊スノーパーク（スノーモービルまたはバナナボートをプチ体験。どなたでも簡単に乗れる）

その後、最後のスポット米沢へ。待望の米沢牛をご賞味。昼食後はフリータイム。上杉神社、米沢織雑貨カフェの鷹山堂、前田慶次など戦国武将ゆかりの地などが楽しめるとの事。歴女的傾向もある麻子。観光スポットをまわるたいが、カフェでゆっくりすることにした。この短い2日間。本当に心から楽しめた。緊張せず、全然知らない参加者とも夜遅くまで語り合えた。「麻子ちゃんはそのままで十分おもしろい人なんだから」とみんなに言われた。大赤字の鉄道でお客様を楽しませよう！と落語まで披露してくれた方言車掌さん。自分より辛い境遇にもかかわらずがんばっている酒蔵の鈴木さん。みんな辛いのに気持1つに楽しくしごとしている。うさぎ商店街の酒屋のおばちゃんが「辛いという文字の一を足す「幸」という漢字になるよね。というさりげない言葉にココロが温かくなった。新しい自分に生まれかわるのでなく本当の自分に気づかせてくれた旅。まさに神の使いであるウサギが結んでくれた「結」と「結子」そして、3匹目のうさぎはみつけれなかったけど、まさに「自分の中にいる」。麻子は「しばらくぶりに実家へ帰ろう！」と席を立った。

●置田麻子（ペルソナ）の想定される心の動き・感想

- ①特別感のある朝採りさくらんぼ狩りは子供のようにしゃいでしまったが、無心になれた。旅館の若旦那が「今度は冬においでください」と誘われた。雪景色も素敵だし、「スノーモービル」の乗車体験も楽しめるそうで、ぜひ今度は「恋とりっぴ：冬旅」も企画して頂きたいな。
- ②さくらんぼ狩りしているときが一番ありのままの自分を感じた
- ③上杉神社の上杉伯爵邸の中に「茶房」という抹茶を飲めるカフェがあって、古い屋敷の中にじゅうたんが敷いてあって座って抹茶が飲める。（リーフレットにある）時間がなくて10分くらいしかいれなかったけどすごく良かった。
- ④今回は、行けなかったが、戦国時代に本当の武将が着た甲冑が残されていて興奮しそう。上杉神社の近くの宮沢資料館という名前だったと思う。戦国時代のこの武将はこういう人だという説明があって、身分が上になると甲冑もすごくて、そういう違いも見られてこんどもういちど来たい。
- ⑤米沢市内は点々と楽しめるポイントがあるみたいで、楽しそう。

●ストーリーの意図・ポイント

- ①実際、モニターツアー時今年は積雪が以上に少なく、飯豊のスノーモービル体験は中止。代案として「アートなイラスト体験に振り替えた。また、観光協会のはからいで、スノーモービルの現物を見学させていただいた。参加者全員が「こんどは、ぜひ乗ってみたい！」とワクワクしていたのが印象的だった。アート体験も「無心になり、ありのままの自分に戻れた気がする」という声も。やはり、体験ものは、「ココロのデトックス」「ありのままの自分に気付く」を表現する要素として欠かせない。
- ②「旅のしおり」の重要性。旅の「おしながき」みたいなものである
- ③今回の旅は「縁切り」「縁結び」がテーマ。一見、上杉鷹山にまつわる歴史探訪、最上川の舟運が色濃く残るレトロなまち歩きなどは、関係ないように思える。しかし「つらく厳しい土地でも自分の気持ち次第で地獄にもアルカディア（理想郷）もなりえる」と鷹山が教え、イサベラバードがその郷土愛がにじみでた風景を「東洋のアルカディア」と表現。自分を変えるのではなく、本当の自分に気づかせてくれる旅になるように意図した。そのストーリーを「神の使いである「ウサギ」が結ぶ。
- ③今回のツアーのコンセプトは、次の2つの柱がある。①悪縁を切り良縁を結ぶ（その仲人が神の使いである「うさぎ」）である。②ココロとカラダのデトックス（カラダに良くないものを出し本来の自分にリセットする）。
- ④もともと人間のからだには「自然治癒力」というスゴイ「パワー」がある。カラダだけでなくココロも同じ。それを「非日常」「ココロのふれ愛」を通じ、「ありのままの自分に気付く旅」を感じ取って欲しい。という気持ちをこめてストーリーや企画を考えてきた。
- ⑤しかしながら、「ありのままの自分に気付く」ことは押し付けにはならない。それは、参加者自らが気付くこと。だから、ストーリー

の中に表現としては入れない方が良い。

⑥喜ばしいことに、少しでも本ストーリーを感じ取ってくれた意見も多く頂けたのがありがたかった。

⑦「まさに『不思議の国のアリス』の主人公になった感じだった。主人公がうさぎといろいろなところに行く話なので、振り返るとそんな感じがした」このコメントは、まさに我々が描いていた物語の主人公＝ペルソナ像という図式である。